

物流博物館では、企画展「トレーラーと牽引車（トラクター）」（会期：2018年10月10日～12月24日）を開催中です。今回の特集では、主な展示資料と概要をご紹介します。



企画展 トレーラーと牽引車

展示の概要

近年、規制緩和により全長21mの大型トレーラーの走行が可能となり、最近では全長25mのダブル連結トラックによる走行実験も実施され、来年1月からは特殊車両の長さ制限が21mから25mに緩和されることとなりました。物流業界のドライバー不足への対処の一環として、今後、こうした大型トレーラー輸送は確実に増えていくものと考えられます。

トレーラーは動力をもつ牽引車（トラクター）に牽引されることで、荷台に直接荷物を載せる同じ馬力のトラックに比べ、より重い貨物を運ぶことができます。また、牽引車から切り離せるため、さまざまな利用の可能性が広がります。日本では、民生用のトレーラー利用は昭和戦前期から始まり、今日に至るまでいろいろなトレーラーが用いられてきました。

展示では、戦前から戦後にいたるトレーラーの歴史を概観し、それぞれの時代においてトレーラーが果たしてきた役割の一端を紹介しています。

展示資料（平原直氏旧蔵資料）について

展示資料には、戦前・戦後の物流産業に大きな貢献を行った平原直（ひらはら・すなお）氏の旧蔵資料が多数含まれています。平原氏は戦前・戦中には国際通運(株)とその後身の日本通運(株)の社員として、輸送現場における自動車利用やトレーラー研究などを行ったほか、戦後には同社を退社し荷役研究所を設立、雑誌『荷役と機械』を発行するとともに、パレット・フォークリフトなどの導入・普及、後進の育成に尽力したほか多方面で活躍し、物流の発展に大きな功績を残しました。

平原氏の旧蔵資料は現在そのほとんどが流通経済大学物流科学研究所平原直物流資料室に保存されています。また、平原氏旧蔵資料が流通経済大学所蔵となる以前の段階で、日本通運(株)通運史料室（物流博物館の前身）が平原氏から寄贈を受けた資料や、複写を行った写真資料が、当館に保存されています。そのほか当館に寄託されている個人蔵の関係資料も遺されています。



戦前のトレーラー



民間で初めて本格運用されたセミ・トレーラー 昭和15年（1940） 青木裕子氏蔵

アメリカのフルハーフ社の技術をもとに、東京都港区に所在した金剛製作所が製造し、当時の運送会社が運用したもの。鉄道貨物の集配に用い、荷役中の待機時間のロスを省くなど能率を上げました。平原直氏撮影。



省営バス・トレーラー 昭和8年（1933）頃 物流博物館蔵

自動車運送の急激な発達をうけ、鉄道省が鉄道建設予定線の先行・代行、国有鉄道の機能の補足を目的に、自動車による貨客営業を昭和5年（1930）に開始した。鉄道と同じように乗客と貨物、手小荷物、郵便物を運び、昭和8年にはバスが牽引するセミ・トレーラーも導入されました。民生用のトレーラー利用としては最初期のものといえます。

写真の車体には「美濃白鳥一正ヶ洞」とあり、白城線（美濃白鳥・牧戸間、岐阜県）のものとなります。

戦時型特殊一軸被牽引車（一号型） 昭和19年（1944） 青木裕子氏蔵

昭和16年（1941）の日米開戦後、輸送量の増大に加え、戦局の推移に伴い輸送条件が悪化の一途をたどるようになります。写真は資材不足の中で廃車となったトラックを改造して製作されたトレーラーです。平原直氏撮影。

戦後のトレーラー

戦後復興期にはかろうじて残っていた戦前の車両に加え、アメリカ軍の払い下げ車両を利用したトレーラーが使われています。国内のトラック生産は軍需から民需への転換が図られ、生産を再開したメーカーの車両も用いられるようになりました。

自動三輪車のメーカーは、四輪車メーカーに比べ戦後の立ち直りが早く、比較的順調に生産を再開しました。戦前に始まっていた鉄道貨物の集配におけるトレーラーの能率的な運用方法は、戦後、三輪トレーラーの開発で広く行われるようになりました。

朝鮮戦争を経て経済を回復させた日本では、電源開発が積極的に行われ、また、重化学工業も発展し、特殊な重量物の輸送需要も増加しました。それに伴い重量品輸送用のトレーラーの開発が進みました。

経済成長が進み、1960年代以降国内輸送が鉄道からトラック中心に推移する中で、様々な用途のトレーラーが登場し活躍しました。



大阪・梅田駅新3号ホームの三輪軽トレーラー（2.5トン積）
昭和30年代後半（1960年代前半）



アメリカ軍払い下げのフェデラルのトラクター 昭和31年（1956）頃



黒部ダム建設用のセメントサイロとセメント輸送用トレーラー
昭和34年（1959）

昭和38年（1961）に竣工した黒部ダム建設用のセメントは、北大町専用停車場に隣接したセメント貯蔵用サイロからダムサイトまで、セミ・トレーラー型タンクローリー7台（2台1組、1台は予備）を用いて3交代制で24時間輸送されました。

コンクリート打設に必要なセメントと骨材が不足すると、ダム建設に大幅な遅れを生じさせるため、その輸送は中断することを許されない厳しいものでした。その行程は約20kmあまりでしたが、1/10の急勾配が続き、機材の故障が相次ぐなど、常に緊張を強いられる過酷な輸送だったといえます。



変圧器を輸送する500トントレーラー（250トン型） 年代不明

500トントレーラーは、各部分を組み合わせることで350トン型、250トン型としても使用できました。写真の変圧器は東京電力㈱・東富士変電所へ納入のもの。



高速道路対応のフル・トレーラー
昭和39年（1964）

名神高速道路の栗東・尼崎間開通後、高速道路での運用も前提に導入されたバン・タイプのもの。

1. 普及事業

A. なつやすみ段ボール工作コーナー

実施日：8月12日・19日(土)(全2回)

参加者：こども92名+保護者94名=合計186名

概要：梱包資材である段ボールで自分だけの機関車・トラック・貨物船を制作。



B. 学生向け体験講座「美術品の梱包・入門(陶器)編」

実施日：8月10日(木)(午前・午後全2回)

参加者：24名

概要：梱包の専門家を講師に招き美術品梱包の初歩を体験。日本通運(株)美術品事業部協力のもと、博物館学芸員資格を取得中の大学生や、博物館関係者などが参加。陶器の梱包体験のほか美術品専用車を見学。



C. 古文書講座「古文書を楽しむ～古文書講座初級編～」

実施日：5月27日、6月10・24日、7月1日の土曜日(全4回)

参加者：のべ107名

概要：典型的なくずし字の読み方や、江戸時代の古文書のパターンに触れて、楽しみながら古文書に親しむ講座。

講師：学習院大学非常勤講師 田中潤先生



D. 古文書講座「飛脚問屋の内部事情と社会相―「飛脚問屋・嶋屋佐右衛門日記」をよむ―

実施日：10月28日、11月18・25日、12月9日の土曜日(全4回)

参加者：のべ124名

概要：物流に関する歴史について、古文書の解説を行いながら解説する講座。今回は当館の特別展に関連し、江戸の飛脚問屋・嶋屋の日記(郵政博物館蔵)をテキストとしてとりあげ、飛脚問屋での不祥事を記載した部分を解説。記事から見えてくる江戸の社会と文化についても解説。

講師：成城大学・早稲田大学非常勤講師 滝口 正哉 先生



E. 映画上映会

実施日・テーマ：

5月28日(日) 「1964」

6月25日(日) 「大移転作業―引越し大作戦」

7月9日(日) 「『美』を運ぶ人びと」

8月27日(日) 「トラックドライバー魂」

9月10日(日) 「超重量品輸送の世界」

12月17日(日) 「海と陸と」

1月28日(日) 「戦後の輸送革新」

2月25日(日) 「超重量品輸送の世界・2」

3月25日(日) 「高度経済成長と生活革命」

参加者数：のべ419名

概要：当館では昭和20年代～50年代の物流に関する映画フィルムを収蔵しており、昨年度までに約100本に及び記録映像のデジタル化を完了した。今年度はデジタル化を記念し、テーマを設定して作品を選び上映会を毎月1回開催。



F. クリスマス・サンタクロース映画会

実施日：12月16日(土)(午前・午後全2回)

参加者：こども21名+保護者27名=合計48名

概要：プレゼントを「運ぶ」サンタクロースをテーマにした映画を2本上映し、サンタがこどもたちにプレゼントを贈呈。



G. 博物館学芸員実務実習の受入

実施日：8月1日(火)～4日(金)/8日(火)～13日(日)(10日間)

受入人数：青山学院大学2名・鶴見大学1名・専修大学1名・日本女子大学1名

概要：大学で博物館学芸員資格取得を目指す学生の実務実習の受入れ。展示実習では物流の歴史展示室での鉄道コンテナの展示を改良。



H. 高輪伝馬の会

概要：高輪伝馬の会は、平成15年(2003)11月に発足した自主的な勉強会。平成29年度も引き続き毎月第1・3土曜日に当館を会場として開催(8月を除く)。

参加人数：延べ98名

開催回数：全21回

2. 特別展

A. 特別展「飛脚問屋・嶋屋佐右衛門日記の世界」

会期：10月21日(土)～12月10日(土)(51日間)

会期中入館者数：2,016名

概要：18世紀の江戸の飛脚問屋「嶋屋佐右衛門」の日記(郵政博物館蔵)をとりあげ、当時の飛脚の送達システムなど仕事の様子、大名家や商家など取引先との付き合いや他の飛脚問屋との関係、商家としての日々の出来事や行事、事件など、飛脚問屋の実像を紹介。あわせて関連資料を展示。



3. 外部協力

A. 共催事業

(1)講座「内航船ペーパークラフトを作ろう！」

共催団体：日本内航海運組合総連合会

実施日：8月25日(土)(午前・午後全2回)

参加者：こども21名+保護者36名=合計57名

会場：物流博物館

概要：くらしと産業に欠かせない貨物を運ぶ内航船についての解説を聞き、貨物船のペーパークラフトを制作。

講師：オトウカトウ氏(工作ユニット)



B. 外部イベント協力

(1)ちいさいとこネットへ協力

実施日：11月20日(月)

参加者：博物館関係者

主催：ちいさいとこネット(小規模博物館のネットワーク)

会場：物流博物館

概要：ちいさいとこネットの例会において当館での見学会開催

(2)第11回優良ロジスティクス企業業界研究会2018への出展

実施日：2月20日(火)

参加者：就職活動中の学生

主催：ロジスティクス人財フォーラム(イー・ビジネス・ドットコム(有))

会場：秋葉原UDX2F(アキバスクエア)

概要：学生に対するキャリア教育の一環として実施され、物流関連企業や業界に対する理解促進を目的とした合同説明会。物流関連企業のみが参加することが特徴で、物流業界に興味を持つ学生に対し当館を広くPR。当館の出展は今回3回目。

4. マスコミ掲載(主なもの)

①「朝日新聞」5月17日朝刊

「わがまちお宝館 物流博物館 暮らしの支え 発展史学ぶ」

②「日本経済新聞」11月29日朝刊「春秋」欄

特別展「飛脚問屋・嶋屋佐右衛門日記の世界」の紹介。

開館20周年を迎えました

物流博物館は1998年8月11日に開館し、今年開館20周年を迎えました。20年の間に来館して下さった方の人数は16万1千人を超えました（7月末時点）。

記念に物流博物館のマスコットキャラクターカーゴ君の実物大パネルを入口エントランスに設置し、来館者の方々をお出迎えするとともに、記念撮影スポットとしてもご活用いただいています。

開館記念日から8月19日までの間、20周年記念オリジナルクリアファイルを来館者の方々に配布しました。



これまでに開催した企画展・特別展・ミニ企画展・コーナー展示のチラシ



20年の間に開催した企画展・特別展・ミニ企画展・コーナー展示は22本ののぼりです。

物流博物館NEWS vol.15

2018年11月15日発行

編集：物流博物館

〒108-0074 東京都港区高輪4-7-15

TEL03-3280-1616 <http://www.lmuse.or.jp>

発行：公益財団法人利用運送振興会

物流博物館のご案内

【開館時間】午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

【休館日】毎週月曜日・毎月第4火曜日・祝日の翌日・展示替期間・年末年始

【入館料】高校生以上200円/65歳以上100円/中学生以下無料 *団体20名以上半額

【交通】JR・京浜急行 品川駅 高輪口徒歩7分
都営浅草線 高輪台駅 A1 出口徒歩7分

